

獨吟軒句題谷詩

(二)

1972.11.5.

4 縮緑愁墳地。  
5 光潔無秋綠

地にや望むじ縮るる緑  
繰りひてみやがれどもなく

巴

巴童が「「緑がへ細く、て青いものへなら、あの山々はへすれそうな緑へ。なんだか、どう  
りと溶けて流れあちてしまいそうな気がしますね」

どんごと流れる緑、か。うまいな。山々が重なりあつていて。遠くの碧は霧にうすれ、山が近  
づくにつれて、夏の木立の濃い緑は、だんだん深くなり、ひとかたまり、というよりは、染料と  
混ぜあわせた、糊の一樽をや一升あたりにぶちまけたみたいだ。そういう山の緑をうたつた詩人は、  
わたしの知る限りでは、いない。文人のうたわなかつたその緑を、文人の使い古したことばで  
表現することには、まい。新しい感覚のどうえたものを、伝統の詩型のなかに詰めこもうとする  
のが無理かもしれない。だが、無理を承知で無謀の表現に乗り出すのが、詩人のいとなみだ。何ん  
にお前は「あなたで、まがおうたいなや、うねば……」といった。お前の見つけた、へどろりと流れる  
緑へを、どうしても、文字にしなければならぬ。とはいっても別にやうしゃチコばるーともない。

「頬線」というのはどうだ。

上から下へ吹く暴風のことを「焚輪」というが『爾雅』糸天には「焚輪はこれを頬といふ」と説明する。風にかざらぬ、重いものがすしりとおちるのが頬だ。だから熟語にして「相墮」ともいう。『出說新語』四止に、嵇康が酒を飲むと「頬喜として玉山のまさに崩れんとするが如く」だつた、といふ。この「唐」は湯と同じで、大水がどよど流れるや、まだ。

わたしは、竹林の七賢の中でも、嵇康が一事に好きだ。「阮籍はどうですか」だと。阮籍は七賢の指導者といふことになつてゐるうしい。これが世間の俗談だ。なんとなく竹林に寄り篤つた七人の元曲り、お互に相手を指導者だなんぞ、考えもしなかつたろう。徒党を組むのが嫌いだつたけずのかれうだ。どこのでお前のいつた阮籍、どうも不気味な人物だ。もちろん嫌いであろうはずがない。ただ、どうも底の見えぬ済みたいだ。嵇康とて底まできれいに見え透くといふものではない。けれども気分がピッタリ来る。

話をもとにもどそう。長安にいたころ、書物によく目を通している男がいて、『世說』のあの「頬喜」は「僕哉」とする本があり、その方がいいのだ、といっていた。それなら、同じところに出ている李豐についての「頬喜として玉山のまさに崩れんとするが如し」ととてもいいのだ。「讀」は「頬」と同じだから、崩れることを「頬」という点では問題ない。韓退之先生が「高麗上人を嘆む序」に「ポンヤリとアッサリとつづけたので口頬墮委靡し潰敗して、かたうがつづまじ」といひて、一貫一貫まことにへどろにと落つて流れあちてしまつたうなべつていうんだ。頬

といえば嘘とへるのには極めて自然だから、「頬縁恵地」とするか、なんだわ、お前のそのシカメの面は。

巴童「わたしがふと言つたことでも、先生にかかると、むづかしくなってしまふのですか」  
うん。たしかに、やうだろうな、文字に書くことば、というのは、いわは役人用でわ。役人とい  
う奴は、やさしいことでも、しちむつかしくしないと通用しないのだ。わたしのように素直な男  
でも、あの世界で二、三日もすゞと、や、ぱりひねこびてしまふのだ、さう。『礼記』に「古者に  
則り、先王を称す」というのが、かれらの拗りどころだが、礼楽を、どれだけ本氣で考へてゐ  
ことやら。それはともかく、お前のそのシカメの面を「愁」と生かして「頬縁愁恵地」とやつた  
うどうだわ。

巴童「先生はどうも、愁えたり悲しんだりするのが好き、なようですが、わたしはキラキラ光  
てるのや、さ、ぱりときれいなのがいいんです。今日みたいいな夏の晴れた空はいいですわ。秋  
はあまり好きじゃありません」

それではまた一句で、たよ「光潔無愁絲」。お前はまだ躊躇しがるだらうが、頭のいいお方にお  
前のざつぐはらんなことはをわかるように翻訳しようとする。こついづ回りくどい手続きもふ  
去ねばならぬのさ。そこで「光潔」だ。宋の魏照の「芙蓉賦」に「重陽の妙手を单くし、流池の  
光潔を測る」という句がある。上があ前のいうへキラキラ光ってるのくに、下がへや、ぱりとき  
れいのくに当るだろう。その二つの句を「光潔」の二字で表せることにする。「愁絲」と

は、縁のように細く長いすじも垂れて、がつて、いる愁い、という二二ノリヤ。おまえにはすぐわかるだろう。人さまに口ひかりにくいと感ぜられるかも知れぬ。愁いのいとぐちの愁緒があらのだから、愁いのいとの愁緒があつて不思議はないはずだ。だが、強いて異を立てる氣もない。「縁」を「思」としてもいい。思だつて si という音に、細い長い感じは出るだろうから。

巴童「わたしの言葉の注釈はけっこですが、先生の道ですよ。その愁いの縁に、何を結ぶおつもりですか？」

6 涼曠吹浮媚。  
7 竹香滿淒寂

そよ風はなよろに吹けり

資

404

巴童「へえぎるものもない広い野っぽうを涼しく渡るそよ風だからへ涼曠／なんですね。これにも典故があるのですか？」

いや、「これはわたしの造語。しかし似たことばがないではない。宋の謝靈運の「初めて郡を去る」詩に「溪を越つて終に水を涉り、嶺に登つて始めて山を行く。野は曠くして沙岸淨く、天高くして秋月明かなり。石に憩いて飛泉を挹み、林に攀じて落英を攀む」とうたう。いまは秋でもなく、夜でもないが、野は曠く、おのれを縛る役人の扱てから離れた樂して、にも、通じようどいうものさ。また鮑照の「舞鸞賦」には「浮暉の藻質を鎧め、清迴の明心を抱き、遙壘を指して

輪を翻し、裏闇を望んで音を揚ぐ」という。世の君子はわだしのことと軽薄才子といつていろいろ

しい。正に浮城の蓬萊仙人。お前はキラキラさつげりだがら、ごしうめ清遊の明心居士で。そのふたりが二羽の鶴となつて、蓬萊山にむかってバタバタ飛び、眞齋山でリヨウリヨウと歌う。

巴童「いいですねえ、このあいだタイム・マシンに乗つて先生に会いに来られた未來からのお客様や、まがへ軽薄とは要するに地をかへれば時流に躍んでてあるの謂に他ならぬ」といつておいでした。じつかしい」とばでよくわかりませんが、なんだかふわふわいい気持でした。躍んでるとはやつげり空を飛ぶことでしたか。

参ったね、お前には。だが、学問はなくともお前は不思議に物の中心、一とばの本質をつかむ能力をそなえているようだ。

巴童「平生お口のわるい先生に、今日は朝からほめられ通しで、氣味がわるいです。ものがいえなくなつてしまひます。人をおだてるの口それくらいにして、へ浮媚<sup>ハフメイ</sup>とはいつたい何ですかそれもりだしの造語。といつて、しつかえはないだスウ。さっきお前がいつた、ふわふわといい氣持、といふほどの意味で。娘さんとすれちがうとき、ふつと、匂いのよくな色っぽさのただようことがあるだろう。その色っぽさの、目のさめるようなのが妍眉、つんとしたのが秀眉、しことりしてれば秀媚、けずかしそうなのが含媚、隠媚。だがいまのこの風に吹かれ光をうけて照りかげる野のつやつぼさは、浮媚としか、言いようがない。

巴童「へ浮媚<sup>ハフメイ</sup>でうつとりさせておいて、いきなり竹義のそつとするといふに人を誘い一もう

魄胆ですか。竹の匂いにも故事があるのでしょうが、説明がなくともわかります」

すいぶん口が悪くなつた。竹の匂いに故事はない。竹林木叢の間に育つたわかれなら、肌で感じ心で聞き、いや、その手間もかけず、父母に生んでもらつた二の平凡な鼻でかぎ知つていろ竹の香を、石置しか歩かず本の上でしか学問せぬ人が、竹に匂いがあるものか、などと議論をしていたことがある。少陵の杜甫などが「嚴鄭公の宅にて同じく竹を詠ず」る詩に「雨洗けは娟娟として淨く、風吹けば細細として香ばし」とうたつてゐるのだが、かれらにとつては杜甫どのも田舎おやじにすぎんそうだ。わたしは、遠いながらもあの方と血でつながり、物を見る視線の構造にも通じるところがあるのであるらしい。都の人々の見なれぬへ漁翁<sup>ヨウヤウ</sup>という語を、「一にはめこんでおへこにしよう。さて、お前の香だ。

8 粉節塗生翠。

白粉剥きぬ節けづやかに

9 草髮垂根葉

髪の毛とほつるる草や

巴

巴童「先生のおっしゃつた少陵さまの詩、なんだか竹が、女人になつたみたいですね。そんなふすみすみした肌に白いあの粉は、さしすめ、おしゃろいをはいたところでしょうか」  
お前も隣におけないねえ。なるほど確かにそうだ。それに水田の稻から巻きはじめたこの聯句、そろそろ艶つぱくしてよいところだった。そこで「粉節塗生翠」

巴童「けたしが思い浮べたのは、隣のお竹さんが祭の日におしへいを塗って団子みたいな顔をしてたとこなんですが、先生の手にかかると、薄い美人がただかど襟足を抜いた感じです。身も世につれて、伴なう婦人も浮き沈みすると見えます。ところで、遂んでくださった、「粉節」、わたくしもが二ワヤナギとかミチヤナギとかいってるのを、粉節草というのだと、聞いたような気がするのですが、タテに似てかれいいたをつけますわ。あの草が濡れてしまれたところは、それが「そなよなよと、美人の髪のほつれの垂れかかったような感じがいたしますよ」

そう来なくてはいけない。お竹どんでもいいけれど、女中さんかいつも丸く太った赤ら顔とも限るまい。まあ竹夫人でもミス・二ワヤナギでもいい、お前のことば通り「草髪虫恨聲」

10 光霧泣幽涙  
II 雪園爛洞曲

光る露したる涙  
うちめぐり爛ふ洞曲

賀

巴童「おしゃべりをしていると、長い暗い竹のトンネルも、あまり気になりませんでした。もう向うは出口のようですね。光がさして来ました」

お前がそういったので気がついたが、竹林にさしかかってからは、わたしたちの視線が急に黒い円筒を画した、よう局限られ、微かなもの小さなものが拡大し、わたくしたちによびかける。草におく露に遠い光をうけて、恨みをふくんだ女の顔をしたたりおちる涙のようだ。そのような涙に

おのれのほの映るのを見たことがある。奇妙にくつきりと、水晶の玉を通して見た文字のようでもあり、古墳の天井に描かれた地下の星塵のようでもあった。それ以来、わたしは、人の「現実」とよぶものが現実とは思えなくなり、わたしの信じた天も、そこから生じたといわれる秩序も、よそよそしいものになってしまった。女の涙がわたしを変えたのか、わたしの変るのを女の涙が照らし出したのか。どうもそこにはうがよくわからぬが、透明な玉を通してもののかけが、時として、やかでに映るようだ。今までまともに見えていた世のすがたが、わたしには逆側はじめた。陶淵明の文学が親しく感ぜられるようになったのは、それからだ。かれに「桃花源の記」という文章がある。

晋の太元中、武陵の人、魚を捕つるを業とせり。溪に沿つて行き、路の遠きか近きかを忘るに忍と桃花の林に逢いめ。岸を夾みて数百歩、中に雜樹なく、芳草鮮美にして、落つる英は繊粉たり。漁人、是だこれを異とし、復た前<sup>ヨリ</sup>み行<sup>キ</sup>、その林を窮めんと欲す。林は水源に尽き、便<sup>ハ</sup>ら一山に得<sup>ハ</sup>いめ。山に小口あり。攀縫として光あるびごとし、便<sup>ハ</sup>ち船を舍てて口よりに入る。初めは極めて狭く、縁ぐ入を逼するのみ、復た行くこと數十步、豁然として開朗す。

巴童「きれいですね之、わたしもそんなところへなら、今すぐでも連れていいたいですが、先生のはへ竹源橋<sup>ハ</sup>、きわめて狭くやつと人が通れるだけ、といふところだけは同じですけれど、道はいよいよ狭く、露やら涙やらで袖もぐっしょり、心細いことですねえ」

こじめ。へうす口をたたきあつて。だがまあ、そういう無神經な奴を供につれているので、わたしの氣も晴れる。霞々において露の一つ一つに、お前のいうへ竹源郷ハタケイマチが映じ、華麗カクニにいづる珠玉の網に相映する世界のように霞々と無限に重なりあいわたしたちをとり囲み。わたしたちは上下四方に鏡を貼った迷樓の中をさまよう虫。桃源郷への道に劣らす曲りくわって行きはするが深いラビリントスを出たならば、豁然開朗カクランどころではない。燐然爛然としてお前の凡眼は無辺の光耀カクヨウに眩めくらめこづ。

## 12 芳律老紅醉。

花さく徑さび紅に醉ふ

## 13 摺蟲鍾古柳

蟻つどひ柳むしばみ

巴

巴童「あ、しゃる通り、目がまわりました。たぶんそのせいでしょう。竹林を出たら花の径、どこかがそのお花やん、すっかり老いぼれ、酔っぱらったばあが顔を見てうら火ヒツヤマツ照らせ、若い衆にしなだれかかるてるみたいだ。柳は柳で毛の抜けたじじいそっくり。どうんなやい、蟻がいづけいたかっています」

## 14 蟬子鳴高遠。

蟬ふかき高處タカヒに鳴けり

## 15 大帶委蘿葛

帶なして黃カミに葛ハナたれ

賀

心の卑しい者は低いところを見ぬ。思いの浅い者は表面しか撫でようとせめ。田を放つて高きを見よ。心をしそめて遠きを思え。ほらあの高い梢に、いま穂をねぎすてたばかりの幼い蟬が紺碧の天に飛び立とうとして鳴しているではないか。山の斜面を見よ。曉に照る葛の群葉が、大きな扇となって深淵にむかって垂れてがゝっているではないか。

16

繁浦交狹浜△

みぎは狭にむらさきの蒲

巴

17

石錢差復譜

石の上に鐵あらす苗

巴童「深淵もけゝこうですけれど、浅瀬には浅瀬の赦きがありますよ。汀も狭しとぎしりしげた浦はどうです。先生は『十二月樂詩・二月』に『蒲に劍を交うるが如く風は薰るが如し』とおうたいになりました。紫の花のなんとかいなことでしそう。先生の『惣公』には『河蒲に繁草を聚む』とあります。色っぽいのがまんざらでもなさそうです。わたしは先生の真似をしていります。岩の上に鐵をばらまいたように斑模様の苔の絨毯、ふかふかと寝ころびたくなりますね」

わたしの武器でわたしを攻撃するだけ大したバルチザン。おおせの通り、色っぽいのも嫌いではない。少陵どのと同じくこの詩人に常健という人がいる。幽娟きわまりない作をいくつかのこしている。「白湖寺後溪宿雲門」に「洲渚には曉色静かに、また花と蒲とを観る」とうたつた。

それをお前の「ことばで思い出したよ。

巴童「わたしの『ことば』が當たりやうの詩の典故などといふ冗談でもあるのではないでしょうね。わたしが常々、まの詩をテコにして先生と張りあつてもりもありません。わたしの覚えているのは先生の詩だけです。錢を散らした旨だって、どこかでお歌いになっているはずです」

「華清宮を過る」詩の「賛生未落時、石断繫絶斜」の「ことば」でいふるのかい。じょいよも、て恐縮至極だ。

18 厚葉皆蝶麻。 ぼゝとりと厚き木々の葉  
19 汗沙好平白。 さらさらし沙葉白く

『礼記』曲礼に「往きて来らざるは礼にあらず・来て往かざるもまた礼にあらず」という。お前がわたしの真似をしてくれたのだから、わたしもお前の真似をせぬわけにはゆかぬ。とにかくにも、わたしは春礼郎、礼の専人だったのだからな。お前の真似をするとなれば、裸の目で見るしかないわけだ。名づけて分類するのではなく、形と色で描くのだ。

巴童「わたしの真似などとおしゃって。先生はやっぱり先生ですよ。『膩葉蝶花曲門を照す』が『十二月樂詩・四月』にありました。でもそのぼゝとりしたやつを、洗いさらして眞白な

沙にしたところは、やすがですわ」

おやみや、ほめるのまで往きて来たる、かい。礼儀正しいお人だよ。お前をわたしの後任に推薦しておけばよかつた。さつきは遠慮したのだが、お前が事礼郎になる氣なら、ちと講釈しておかねばなるまい。わたしの「大幕委賛易」の句についてだ。曲れに「立つときは軽折して佩を垂る。主の佩倚けば則ち臣の佩垂れ、主の佩垂るれば則ち臣の佩委す」という。立って物を受け渡しするとき、主人と客の間でなく、互いに脇の曲つていろ程度に腰をまげる。主君と臣下の間でなら、君が直立するとき、臣は腰をまげて佩玉が前に垂れ、君の佩玉がさきの臣ほど垂れるとき臣はいよいよ深ぶかと腰をまげ佩玉は地につかねばならぬ。仁王け観音やまの門番のくせにいつもそっくりかえっている。あれは退之先生の「いわける夷狄」。わが礼法で律するわけにしけくましいが、お前のそっくりかえっているのは、困ったものさ。

巴童「なあんだ。それがいいにくつてわざわざ薦の葉のところまで返られたのですか。ペーペーお辞儀ばかりしていなければならぬ奉札郎なんぞごめんです。先生だ、てそれがいや、におやめになつたのではありますか。ご薰陶のおかけで、役人になりたいと思つたことがあります。それでもどうしてもなれということなら、馬をかう牧場の下役人にもしていました、だきましよ。馬にお辞儀はいらないでしょう。ほら馬めも突つ立つたままでですよ」

うまく逃げたな。だが、青文字とはいつたい何のことかね。

巴童「先生のようになんでも知つていらっしゃる方でもわかりませんか。いつだつたか先生のお供をして古い祠にいったとき、これは戦国時代をくだらぬとおっしゃった鳥がありましたわ。絵のよくな文字が書いてあって、その中に「青」というのがあり、おたずねしたら「青」だとおっしゃいました。立てる馬を前から見たのとそっくりなので、青駒とけなるほどこのことだつたのか。黒い馬を青とけおがしたことだと思つて、納得がいったのです」

思い出したよ。あのときのお前の類付まで。なにを不思議な顛をしてるのだろうと思つたが、そういうことだったのか。おもしろいね。わたしのことばは詩人や学者なら苦労はしても解くだらうが、お前のことばはなかなかほどけまい。わたしたちが死んだあと、世の物好きがあでもない、こうでもないと、首をひねることだらう。馬におした烙印と見てしょく、草におとした影と見てよく、吳均の詩に「雁の足は葦なる沙に印せり」というように沙上にのこした足あとを見てもよい。いずれにしてもわたしの「汰沙好平白」とは対していて、へっぽこ文人の対句のようになつたりくついていないところも、いまわたしたちの見ている風景のようで、よろしい。

巴童「ほめられたのか、くやされているのかわかりませんが、畠れできた水面をひくひくと泳

ぐ鯨のように、わたしは楽しんでいるのです」

22 慶<sup>カミ</sup>鵠<sup>カモ</sup>瞑<sup>カム</sup>單<sup>カタ</sup>跨<sup>カマツチ</sup>△

慶せし鵠ひとつ佇<sup>タム</sup>暮<sup>カム</sup>  
りよアリよウと姑<sup>ガマ</sup>なきいでて

そつして、わたしの方は、慶せ一<sup>イ</sup>けて奮<sup>カム</sup>づめた鵠みたいに、日が暮れかけて来たのにひとつぱつんと立<sup>タム</sup>っている、というのかね。雀どもは群れたがるが、そうでないのもいる。『莊子』逍遙遊に「北冥に魚あり。その名を鯨となす。鯨の大きさ幾千里なるかを知らず。化して鳥となる。その名を鵬となす。鵬の背、その幾千里なるかを知らず。怒して飛べば、その翼は垂天の雲の如し……」その大きさ幾千里とも知れぬ鳥が群れて飛びはせぬ。鵬も魚から変化したのだが、鯨なんぞではない。

巴童「鯨の変化したもの、鵠ではなかつたようですが」

あけらのようにつべーべと鳴く奴だな。「古詩十九首」に「淒凜として歲<sup>ノ</sup>に暮れ、蟪蛄<sup>ヘビクサ</sup>ぞ夕べに鳴悲す」とうたう。晉<sup>晋</sup>閻<sup>ヤク</sup>闔<sup>ヒ</sup>は土の中にもぐついて、夕方になると這い出し尤もうしい声をあげる。賈誼の「風賦を弔う賦」に「江湖に横るる鱗鯨も、まことに特に蟻蟻に制せられんとする。」つまうめ奴はすぐれた人間の傷口ばかり探し歩き吹聴しては、自分が偉大になつた氣でいるのさ。

咽瀬驚濤起△  
みなどの波さわだちめ

紓緩玉眞路  
玉眞路うわりづくに

(近武后巡幸路) へ近くに武后の巡幸路)

巴

巴童「言い出したお方が、意外の波瀬に、驚いていやしゃるようですね。うそかほんざるのがお氣の毒みたいで。そろそろおうちへ帰りましょウか」

がなんだ、もう家が恋しくなったのか。駢句はや、と亭の口を巻いたところだ。

巴童「帰らないとおしゃるのでしたら、どこへでしお先、いたします。先ほど教えてください、常建という方の詩にも『溪に入つてまた嶺に登る』とありましたね。ぼつぼつ上つてゆきましょうか。ここからうねうねとりぞい坂道をたどると、やがて神女さまのお廟です」

君子け行くに徑に由らず、といふ。……なんだにやにやして、話は最後まで聞くがいい。そのことばをたてにとて、人は大きな道を歩きたがる。だが徑というのには、田んぼのうねを歩けばよいのに役人どもが邪魔くさがって真ん中をつっかかる。そのつつきたあとのことをいうのだ。道にはばの大小にはよらぬ、むしろばかりでかい徑が多すぎる。田をつぶした道に石をしてその上をがらがらと車が走る。走りすぎると、人間もロバも歩けさせめ。わたしたちの行く一の細々とした道は、坦々とはしておらぬが、山下働き山で祈る人の道だ。

巴童「向うに大きな道がありますね、あれはどうやら福昌宮に通じているようですが」